NUMBER 110 WINTER 2024

THE FINEST VOYAGE TOGETHER

ASUKA

CLUB MAGAZINE

クルーズは新たな時代へ

Special
海から祭りへ
Special
上田寿美子
Essay
辻村深月
Report
飛鳥Ⅲアート公募展
Interview
宮沢和史
Introduce
新作ショー
Foodie
スープ

My ASUKA CLUB

ASUKA CLUB MAGAZINE

Contents

number 110 winter 2024

Special Feature 1
2025年夏のクルーズをご紹介
海から祭りへ —4

8—飛鳥Ⅲアート公募展　審査会レポート

Cruising Library ⑩
船上のミステリ —10
辻村深月

ASUKA CRUISE Interview ⑨
12—宮沢和史さん

もっと知りたい飛鳥のこと ⑨
新作ショー —14

Special Feature 2
16—スペシャルインタビュー
上田寿美子さん

飛鳥の美しいかたち⑨
テーブルナプキン —18

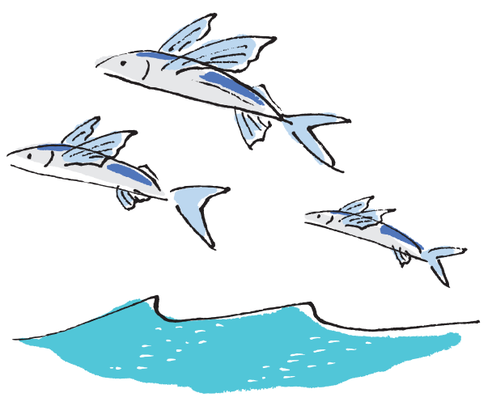
20—寄港地のいちおし

ASUKA WALKING & RUNNING CLUB —21

工房を訪ねて⑥
22—松本育祥

美食遊覧⑨
スープ —24

Welcome Aboard —26
Online Shopping —28
Cruise Desk —29
Club Information —30



発行／郵船クルーズ株式会社
My ASUKA CLUB 事務局
〒220-8147
横浜市西区みなとみらい2-2-1
横浜ランドマークタワー47階
電話 045(640)5302
発行人／遠藤弘之
制作・編集／浪漫堂、アドレッサンス浪漫堂
AD+デザイン／岡本一宣デザイン事務所
写真／北田理純、名取和久、坂本泰士、尾鷲陽介
イラストレーション／楠木雪野、樋口たつ乃、楠のぶお

©郵船クルーズ株式会社
※本誌の記事および写真の
無断転載・複写をお断りします。

お客様の
笑顔が
私たちの
喜び

第七回

お買い物も クルーズの 楽しみのひとつに

「飛鳥Ⅱ」の4つのショップのうち、私はカジュアルウェアを幅広く取り揃えたFLAP-FLAPを担当しています。シーズン毎はもちろん、クルーズのテーマや寄港地によってマネキンの服を着せ替えさせたりウィンドウに陳列している商品を入れ替え、クルーズの気分を盛り上げる店頭演出を工夫しています。また、お客様に商品のご説明をして、納得してお買い上げいただけるように心がけています。たとえば、船内に展示してある工芸作品についてはショップクラーク全員で勉強会をしています。作家の想いが込められたものですから責任は重大です。実際に工芸作家の工房を訪ねて、創作風景を拝見したりお話をお聞きしたりすることもあります。お客様にはお買い物をクルーズの楽しみのひとつとしていただくこと、それがショップクラークとしてのやりがいだと思っています。

この船がつなぐもの。
それは目的地だけではありません。
たくさんの人生をつないで、
喜びを紡いで、
飛鳥Ⅱは海を航ります。

ショップクラーク
K.Mamiya

ずっと船に乗っていると緑が恋しくなるので、休暇中はガーデニングや切花を買ってきてアレンジを楽しんでいる。また、仕事にプラスとなるようにと、希望して飛鳥クルーズオリジナルワインづくりに参加したり、工芸作家の工房取材に同行したりなど勉強熱心な一面も。

Photographs by Kazuhisa Natori

「飛鳥連」の一日

船内でなごやかに阿波おどりの練習

踊る人、観る人がバスで演舞場へ

本番直前！待機中の「飛鳥連」

特集1 海から祭りへ

「飛鳥Ⅱ」の人気定番といえば夏祭りクルーズ。その中から、来たる夏に思いを馳せて、阿波おどりクルーズをご紹介します。

毎年8月に催行される「阿波おどり・高松クルーズ」では、お客様と乗組員が「飛鳥連」を組んで会場へ踊り込む寄港地観光ツアーが人気です。毎年、踊り込みに参加されているお客様もいらっしゃいますが、多くの方が阿波おどりは初体験。本番当日、毎年指導してくださっている「うきよ連」の皆さんに船内で踊りを習います。模範演技を目にしたお客様の中に不安が広がりますが、「うきよ連」中谷会長の「右手と右足、左手と左足を同時に出せば阿波おどり」という一言でお客様の緊張が一気に解けました。

そろいの衣装を着付けしてもらったら、いざ会場へ。演舞場の中でも最大規模の「藍場浜演舞場」が本番の舞台。地元の連の素晴らしい踊り、会場の熱気に圧倒されます。そして「飛鳥連」の登場。「うきよ連」のサポートのもと、乗組員やプロダクションキャストも一緒になって「飛鳥連」をもり立て、観覧するお客様の応援で、踊るお客様も満面の笑み。踊り込みは大成功でした。

興味があればまずは挑戦してみることでご自分の世界が広がります。次回はあなたも「飛鳥連」で踊りませんか?

クルーズディレクター／チーフパーサー Y.Masuda

阿波おどりクルーズは1993年から続く人気のクルーズ。中止期間を除いて、毎年のように参加されているお客様もいらっしゃいます。今回は50数名が寄港地観光ツアーの踊り込みにご参加。初めての方も多くいらっしゃいました。

「踊ったことがないのに、いきなり大舞台に出て大丈夫?」これはよくあるご質問です。女踊りの一糸乱れぬ艶やかな踊りや、男踊りの躍動感溢れる踊りをご存知の方ほど、心配されるようです。でも大丈夫。伝統ある「うきよ連」さんが踊りの指導から衣装の着付け、本番のサポートまでやってくださいますから。祭りの期間は街中のそこかしこで阿波おどりが踊られます。まずはその雰囲気を楽しまれるだけでもいいでしょう。でも、参加するなら踊らにゃそんそん。ご自身が祭りの一部になる、心も踊る体験をぜひご一緒しませんか。

2024年8月「阿波おどり・高松花火クルーズ」にて

「飛鳥連」の一体感が たまらない!

毎年人気の
お祭りクルーズの中から
阿波おどりクルーズを
ご紹介します。

photographs by Norizumi Kitada

この夏いちばんの思い出づくり

プールサイドで夏祭り気分を満喫!

翌日には高松で大迫力の花火観覧

次第に緊張もほぐれ楽しさ全開

アクロバティックな“踊り”に大歓声

お揃いの衣装で艶やかな女踊り

海から祭りへ 海から花火へ

日本全国に夏祭りはあまたあれど、
青森のねぶた祭、秋田の竿燈まつり、徳島の阿波おどりは、
世界にも知られる日本を代表する祭りです。
そんな夏祭りへ海から訪れる、
しかも見るだけではなく踊り手としても参加できるのが
「飛鳥Ⅱ」の夏祭りクルーズの魅力です。

花火

大勢の見物客で混雑する花火大会も「飛鳥Ⅱ」の船上からなら快適。陽が暮れると屋外デッキには観覧席が並べられます。夜風が吹く頃、浴衣に着替えたら、船上の観覧席へ。夏の太陽が海岸線に沈み、空に星が輝く頃、ドーンと打ち上げの音が響き、夜空に次々とあがる大輪の花火。

台湾からも祭りへ

台湾の旅行代理店を通じて、「阿波おどり・高松花火クルーズ」に乗船されたお客様にお話を聞いてみると、台湾でもねぶた祭や阿波おどりは有名だそうです。

「飛鳥Ⅱの夏祭りクルーズは
毎年人気なので、
今年のねぶた祭は
完売、今回やっと
阿波おどりに乗れました!」

「伝統的な舞踊なのに、
一般の人たちも祭りに
参加して踊れるというのが
すばらしいと思いました」

「会場は
にぎわっていたけれど、
飛鳥Ⅱで行けば、
誘導もスムーズで
リラックスして
観られました」

↑画像提供→
(公社)青森観光
コンベンション協会

ねぶた祭

「ねぶた祭」は歌舞伎などの物語をテーマに描いた勇壮な人形ねぶたの山車に続いて囃子と跳ねるように踊るハネトたちが沿道を運行するにぎやかな祭。東北が誇る夏祭りの一つです。

竿燈(かんとう)まつり

長い竹竿に提灯を稲穂に見立てたくさん吊り下げ、五穀豊穣を願う「秋田竿燈まつり」。腕自慢の差し手が、手のひら、額、腰などでバランスをとる妙技には思わず息をのみます。

船上の夏祭り

夏休みクルーズでは、プールサイドで縁日が開かれることがあります。クルーズスタッフたちが趣向を凝らした射的、輪投げ、スーパーボウルすくいなどのゲームにわたあめやラムネ屋さんも登場。目を輝かせる子どもたちに混じって、大人たちだって真剣勝負。

↓画像提供
(公社)青森観光
コンベンション協会

阿波おどり

400年を超える歴史を持つといわれる「阿波おどり」。街のあちこちに演舞場が設けられ、徳島の街は祭りの熱気に包まれます。毎夏この日のために踊りに磨きをかけてきた踊り手たちが、三味線、太鼓、鉦鼓、篠笛などの2拍子の伴奏にのって、踊り歩きます。

夏休みにぴったり、家族で楽しめるおすすめのクルーズ

蒲郡(がまごおり)花火クルーズ

●横浜→蒲郡(※初寄港)→横浜 ●7/25(金)～28(月)
●3泊4日 ●旅行代金 242,000円～1,131,000円

蒲郡まつりの最終日に行われる花火大会では、太平洋側最大級といわれる正三尺玉の花火が1日に3発打ち上がります。東京スカイツリーがすっぽり入る直径約650mに花開く様子は大迫力。縁日や盆踊りなど船内のお楽しみも盛りだくさん。

夏休み 紀州日高クルーズ

●横浜→日高(停泊)→横浜 ●7/29(火)～8/1(金)
●3泊4日 ●旅行代金 232,000円～1,082,500円

日高停泊中は愛らしいパンダたちで有名なアドベンチャーワールドを訪れたり、霊験あらたかな高野山の宿坊に一泊したりできる多彩な寄港地観光ツアーをご用意。今年の夏休みは「飛鳥Ⅱ」で特別な思い出を作ってみませんか。

竿燈・ねぶた祭クルーズ

●横浜→秋田→青森(停泊)→横浜 ●8/3(日)～9(土)
●6泊7日 ●旅行代金 523,000円～2,453,000円

東北三大祭りのうち二つを一つのクルーズで楽しめる「竿燈・ねぶた祭クルーズ」。ねぶた祭の踊り込みツアーでは、そろいのハネト衣装に身を包み、「飛鳥Ⅱ」の乗組員たちと一緒に「ラッセーラー」のかけ声で、飛び跳ねて祭りの興奮を味わえます。

阿波おどり・高松花火クルーズ

●横浜→小松島→高松(停泊)→横浜 ●8/11(月・祝)～16(土)
●5泊6日 ●旅行代金 436,000円～2,044,000円

祭りの熱気に包まれる徳島では、最大規模の演舞場で本場の阿波おどりを観覧。踊り込みツアーの参加者は「飛鳥連」として大勢の観客でにぎわう藍場浜の演舞場で踊ることができます。そして、高松港では船上から高松花火を楽しみます。

※掲載の旅行代金は2名1室利用時お一人様代金です。お得なMy ASUKA CLUB会員旅行代金もございます。※詳しくは同封の商品パンフレットや飛鳥クルーズホームページをご覧ください。

飛鳥Ⅲアート公募展

審査会レポート

「飛鳥Ⅲ」の船内に展示するアートの公募に、全国四十七都道府県から絵画と写真作品、約２，３００点もの応募がありました。テーマは「日本の四季を旅する」～あなたの地域の自然の風景～。日本のアート界を牽引する存在であり、飛鳥クルーズとのご縁も深い画家・工芸作家・写真家の方々をお招きし、審査会を実施。甲乙つけがたい素晴らしい作品の中から１２６点の作品が選ばれました。

創造力を船出させよう。

新しいアートの夜明けに

フランス芸術文化勲章・シュヴァリエ受勲

平松 礼二氏

日本画、洋画といったジャンルにとらわれない作品が集まって、しかも作者の年齢もさまざま。共通しているのは皆さん未来を目指しているということ。ひょっとしたらこれは、新しい船で船出するアートの夜明けなんじゃないかと。第一回目、僕は大成功だと思いました。

会いたくなるような人柄が大事

日本藝術院会員

土屋禮一氏

審査の基準としたのは絵から見えてくる「会ってみたいな」と思わせるような人柄。そして何を見たかではなく、何を感じたかが表現されていること。感動を色と形に置き換えて表現できている絵を見たら、ふっと自分がその絵の中に入っているような気がするんです。

海を超えて活躍できる画家を応援

日本藝術院会員

千住博氏

様々な事柄に感動し、それを伝える力に満ちた多くの作品に触れました。デジタル主導の今の時代であっても、デジタルで表せない素材感や体験価値を補完するのがこれからの芸術の内実。世界の海を超えて活躍できる画家たちを応援したいと思いました。

※千住博氏は別日に審査いただきました。

（順不同）

Photographs by Kazuhisa Natori

審査員左から
平松氏、室瀬氏、田村氏、
土屋氏、中村氏、小山氏

素材の個性を活かした作品を

重要無形文化財「蒔絵」保持者

室瀬和美氏

絵画には水彩から油絵、日本画をはじめ、彫金や染色など幅広い出品がありました。審査のポイントとしたのは、使う画材や素材の個性をフルに活かして、その中に自分の思いを表現すること。それは常々、私が漆芸制作という分野で心がけていることでもあります。

見るたびに違った印象を与えること

海洋写真家

中村庸夫氏

想像していた以上にクオリティの高い写真作品が集まりました。入選した作品は、乗船されたお客様が「飛鳥Ⅲ」の船内でクルーズ中に何度も見ることになります。ですので見るたびに違った印象を与えられるかという視点から審査いたしました。

クルーズを豊かにする気づきの装置に

飛鳥クルーズ アンバサダー

小山薫堂氏

何気なく見ていた風景が、船内に飾られた作品を通して「こんな価値があったんだ」「こんな見方もあるんだ」と気づく。そのきっかけになることが作品にとっても幸せなのかなと。作品が、クルーズでの時間を豊かにする「気づきの装置」になることを願っています。

絵の中に人生がうかがえる

洋画家・壁画家

田村能里子氏

創作された方の人生が絵の中にうかがえちゃうんですよ。それは良いとか悪いとかいうものじゃない。だから審査はとても難しく、でも決めなきゃいけない。洋上で良い心地で気分よく楽しく観てもらえるような作品を、私の経験の上での直感で選ばせていただきました。

入選作品の一部をご紹介します。

グランプリ

「夜へと誘う」

木村直広氏（新潟県） 絵画 P50号

準グランプリ

「陽の沈む頃」

髙田トシアキ氏（広島県） 写真

準グランプリ

「万華鏡／秋」

川田隆夫氏（東京都） 絵画 P20号

準グランプリ

「塩竈港祭り」

成田真梨菜氏（宮城県） 絵画 P20号

多様性に富んだ作品をお楽しみください。

郵船クルーズ株式会社
常務執行役員

熱田 健二

当アート公募展に予想を超える多くのご応募を賜り、心より感謝申し上げます。「飛鳥Ⅲ」には、年齢・国籍にかかわらず、学生や若手作家など多様性に富んだアート作品を広く展示したいと考え、本公募展を実施する運びとなりました。このアート公募展を通じて、ご自身の作品を世の中に出してみようと挑戦する機会がご提供できたならば幸いです。

ご乗船されるお客様が、今回の公募展入選作品126点を含め、多くの作品をゆっくりとお好きな時間にお楽しみいただければと存じます。

「飛鳥Ⅲ」がアートとの出合いの場やお客様同士の繋がりのきっかけになることを期待しております。「飛鳥Ⅲ」の就航をぜひご期待ください。

入選作品など詳しくはホームページをご覧ください。

↓

ASUKA CRUISE Interview

number 9

宮沢和史さん

Kazufumi Miyazawa

「常夏の島 グアム・サイパンクルーズ」に乗船されたミュージシャンの宮沢和史さん。サイパンから横浜へと「飛鳥Ⅱ」が大海原を進む夜、東南アジアから、ポルトガル、南米、沖縄へと音楽で世界一周をするコンサートで大いにステージを盛り上げました。

photographs by Taishi Sakamoto

大海原を進んで ようやく 近づけた硫黄島 地球の丸みを感じる 新しい旅の発見

サイパンから乗船しましたが、陸からこれほど離れたのは初めてじゃないかな。地図だとサイパンと日本は近いと思っていたけれど、2300キロをこうして船で進むと地球の大きさというか、丸みを感じます。自分では旅慣れているつもりでしたが、新しい旅の発見でした。

昨夜のコンサートでも話したのですが、祖父が硫黄島で戦死しています。骨壺だけが帰ってきて、中には砂しか入っていなかったと聞いています。ということは、祖父の遺骨はまだ島にあるということなんですよね。昔から行ってみたいと思っていましたが、一般の人は上陸できない島。今回、このような機会をいただいて、100キロぐらい離れていましたが手を合わせることができました。家族でこんなに近づいたのは僕が初めてですから、感慨深いです。

呼んでいただいたからにはお客様を楽しませるのが仕事です。けれど、「楽しかったですね、さようなら」というのでなく、洋上で自分が感じたことをお客様と分かち合いたかったので、コンサートでも祖父の話をさせていただきました。暗い話かなと思いましたが、皆さん心を開いてくれたような感じで、その後は一緒に盛り上がることができました。

1曲目の「ブランカ」はインドネシア語で出発という意味です。人はいつか必ず海を渡って旅をするというテーマなので、「飛鳥Ⅱ」にふさわしいと思い最初の曲に決めていました。後は、同じ場所でお食事をしながら、なるほどこういう方々かとお客様の様子を拝見して曲を入れ替えたりして。日本の曲や、タンゴ、沖縄民謡、サンバも入れて、皆さんと音楽で世界一周してみました。

僕はもともと内向きな人間で、自分の世界の中で曲を作るというタイプだったんです。

それがあるとき沖縄の扉を開いてしまった。僕の知らないところにこんなにも素晴らしい音楽があったのかと。それからもっと外の海を見てみたい、もっと何かあるんじゃないかと、興味がわいてキューバやブラジルへ行きました。

知らない国に行けば、民族や言葉も決定的に違う。それでも子どもが生まれれば涙を流して喜ぶし、肉親が死ねば嘆き悲しむ。例えば、ブラジルが抱える社会問題は計り知れないけれど、そこから生きる喜びを表現するサンバも生まれている。そんなサンバのリズムに日本人が持っているいらだちや悲しみ、喜びを歌詞でのせたら、僕らが一緒に踊れる音楽になるのではないかなと思いました。僕なりの実験の旅というのかな。食材はいろいろな国からやってくるけれど、調理法は和食でいくぞ、というのが僕の音楽なのです。

頸椎を痛めて、バンドを解散してからはギターにも触れずに過ごしていました。あるとき東日本大震災のチャリティーコンサートに呼ばれました。リングを降りたボクサーみたいなもので、ステージにあがるのが怖い。案の定、声も出なくてボロボロ。それなのに大きな拍手をいただいて。申し訳ないと思いながらも、歌で人を喜ばせることのできるこんな素敵な世界にいたのかと分かりました。それから声がかかったら歌おうと、自分のペースで活動を再開しました。今年はデビュー35周年で大きなコンサートもあって、走り続けています。

今度は仕事ではなく、「飛鳥Ⅱ」に乗りたがっている親を連れて来たいですね。いきなりグアム・サイパンは大変かもしれないから、近場から乗せてあげたいなと思いました。

2024年2月
「常夏の島 グアム・サイパンクルーズ」
にて。

ひとたび沖縄の扉を 開いてしまったら もっともっと外の海を 知りたくなった

Kazufumi Miyazawa

みやざわ　かずふみ

山梨県甲府市生まれ。89年にTHE BOOMのボーカリストとしてデビュー。2014年THE BOOM解散後、しばらく充電期間を持ち、18年より歌手活動を再開。21年にアルバム『次世界』をリリースし、精力的に音楽活動を展開。代表曲のひとつ「島唄」はアルゼンチンの音楽賞3部門受賞。今なお国内外で愛されている。現在、沖縄県立芸術大学で非常勤講師を務める。

サーカスの舞台裏を描いた新作ショーが登場！

夜ごと歌とダンスで私たちを楽しませてくれるプロダクションショーそのメイキングに迫ります

茶目っ気たっぷり、コミカルなダンスに思わず笑ってしまう

プロダクションショーができるまで

新作ショー「ビハインド・ザ・サーカス」、もうご覧になられましたか。これまで数多くの飛鳥オリジナルプロダクションショーが制作・上演されてきましたが、歴代ショーの中でも群を抜いた世界観を持っていたのが、船上にサーカスの舞台を再現した「ファンタジア」（2007年上演）でした。その世界観をさらに発展させて生まれたのが、新作「ビハインド・ザ・サーカス」です。

華やかなサーカス、しかしその舞台裏での団員達の様々な心の葛藤を歌とダンスで表現してみたら…と、まずストーリーの大筋が決まりました。その後は、長年プロダクションショーの制作・演出を手がけるラスベガスのプロダクションカンパニー、CBGと「飛鳥Ⅱ」でやりとりをしながら曲選びが始まります。「なじみのある曲も入れたいけれど、振り付け的にはこちらの曲が合うな」などと、何度も試行錯誤しながら曲を選んでいきます。

そして、2023年末ようやく曲が決まるとそこからラスベガスでは振り付けや衣装の準備が始動。プロダクションキャストは世界一周クルーズのシンガポールで下船して、休暇を挟み、5月からCBGのスタジオでリハーサルを行いました。そして6月、完成した衣装や舞台セットが搬入され、プロデューサーのゲイル・デイビスと共にニューヨークからキャスト達が「飛鳥Ⅱ」に帰ってきました。そこから初演まではわずか数週間。音楽、照明、衣装、セットがそろった状態で通し稽古を行い、世界一周クルーズのラストを飾ってプレミア公演が行われました。

ミュージカルは台詞ではなく歌でストーリーを繋ぐので、サーカス団員たちの心情をどうすれば分かっていただけるだろうかというのが一番苦労したそうです。シンガーのマーティンは主人公なので曲数も多く、ダンサー達もサーカスらしい大きなアクションなどハードな振り付けに苦労しましたが、皆やりがいを感じてがんばっています。次回ご乗船の際には、「ビハインド・ザ・サーカス」を、ぜひお楽しみください。

この後、道化たちが振り返った時の衣装にご注目!

華やかな表舞台と舞台裏の心の葛藤を個性豊かなキャストが歌とダンスで演じきる「ビハインド・ザ・サーカス」

プロダクションマネージャー

Chloe

今回のショーでは、それぞれのダンサーがサーカスの団員として強い個性を持った役柄を演じています。私も少し怖い感じのシーンで占い師を演じています。優雅なダンスも好きだけれど、コミカルなステップで道化を演じたりするのもとっても楽しい。10人のキャストは仕事も生活もいつも一緒。大きな家族のように息が合っているので、私たちの掛け合いをお客様にも楽しんでいただきたいです。

Profile
南アフリカ出身。ヨーロッパ、南アメリカ、カリブ海などの客船のダンサーを経て「飛鳥Ⅱ」に乗船。プロダクションキャストをまとめるマネージャーを務めている。

世界一周クルーズ中に、
演出のゲイルとのリハーサル

舞台裏では毎晩、
アスカオーケストラが生演奏しています

衣装はもちろん、かつらや帽子も
たくさんあります

本番前のメイクルーム、
着替えの順に椅子の上に衣装をセット

10人のキャストは
大きな家族のように息もぴったり

Photographs by Norizumi Kitada, Atsushi Takahashi

特集2　スペシャルインタビュー

テレビでもお馴染みのクルーズジャーナリスト、上田寿美子さん。「飛鳥Ⅲ」への期待と日本のクルーズのこれからについてお話を伺いました。

クルーズジャーナリスト

上田寿美子さん

Sumiko Ueda

一隻ずつ名前を授けられ客船は個性を持つようになる

「飛鳥Ⅲ」の建造開始を祝うキール・レイイングという式典に昨年12月、参加させていただきました。それにしても、本当に良い造船所を選ばれましたね。取材でお話を伺うと、日本独特のお風呂だったり、和食を作るギャレーの設備などは、丁寧に時間をかけて討議をされているそうです。マイヤー造船所は歴史もあり客船建造の実績も豊富ですが、日本船は初めて。湯船の深さ一つからしっかりと話し合って、お互いをリスペクトした上で建造を進められているのが、よく分かりました。

船というのは誕生までに多くの人の手が携わります。キール・レイイングを始め、進水式や命名式など節目節目に式典があって、祝福され希望を込められていきます。大勢の人に見守られ産声を上げる客船の誕生というものは、実にドラマティックです。そして、一隻一隻名前を授けられた船は、その瞬間からそれぞれの人生が始まり、個性を持った存在として育っていくことになるのです。

ですから、今まさに、「飛鳥Ⅲ」の人生も始まろうとしているわけです。キール・レイイングで、「飛鳥Ⅲ」の安全運航と笑顔の絶えない幸せな船になりますように！と、私も心を込めて祈ってまいりました。

日本のクルーズが30年ぶりに大きく動き出します

日本のお客様に近代クルーズという世界の扉を開けたのは、初代「飛鳥」と「飛鳥Ⅱ」だったと思います。そして、「飛鳥Ⅲ」の就航によって、日本のクルーズ業界はさらに大きく動き出していくことになりますし、世界へも乗り出していく時代がやってくると思います。

日本のお客様はもちろん、外国からのお客様が日本船を旅の目的地に選ばれることが増えてくるでしょう。これからはますます、本物の和食や日本のおもてなしが体験できる船の価値というものが高く評価されると思います。それはクルーズ業界にとっても刺激になるでしょうし、マーケットが拡がるきっかけにもなると思います。

この30年で旅の形も変わってきました。例えご夫婦でも一人旅をすることもあれば、家族みんなで乗船することもある。クルーズはこうでなくてはいけないというのはなくなって、多様性が求められるようになっていると思います。「飛鳥Ⅲ」もシングル利用ができるソロキャビンを作ったり、スイートルームもリビングとベッドルームに仕切りがあって、お互いのパーソナルスペースを大事にできるような作りになっていますね。こういった旅の自由度がこれからのクルーズでは大切になってくると思います。

2024年2月
「アスカクラブクルーズ Next」にて

客船は多くの人に見守られ産声を上げて誕生する「飛鳥Ⅲ」の人生も今まさに始まっている

飛鳥クルーズの強みは世界を知りつつ和の心を持つこと

この「飛鳥Ⅱ」はもともとクリスタル・ハーモニーという船で、世界トップクラスのラグジュアリー客船としてアメリカで活躍していました。その世界レベルのクルーズを経験した方が小久江キャプテンを始め、まだ飛鳥クルーズにはいらっしゃる。

世界というのはやはり、すごいですよ。クルーズは日々進歩しているし、技術的なものも発展めまぐるしい。自分たちだけの世界にいては、井の中の蛙になってしまう。世界のトップレベルを知っている方達が築いてきたものがすでにあって、その延長線上に時代性を合わせて進化させていく。そこが飛鳥クルーズの最大の特徴であり強みだと思います。

世界を知っていて、かつ日本の和の心も持っているというのが飛鳥クルーズです。フィリピン人クルーの教育にも日本の文化が流れていることを感じます。日本語の言葉遣いはもちろん和の心というものを一生懸命勉強してくださっている。丁寧で明るいサービスでありながら、ベタベタはしない。外国船だとおしゃべりを楽しむというのか、今日は一日どうだったかという会話があってからお食事のオーダーをします。でも、日本のお客様はスピーディーなサービスをお求めだから、まずすっとご用件をお聞きする。何かお話をするにしても、そこはさらりとしている。自然とそうした振る舞いが身に付いているのだと思います。

キール・レイイングで、
そろいの法被姿の上田さん

「飛鳥Ⅲ」は「飛鳥Ⅱ」とはまた違った個性を育んでいくと思います。二隻を乗り比べて自分に合っている方に乗ったり、一緒に乗る相手や目的によって二隻を乗り分けたり、というように選択肢も増えるでしょう。それぞれの船の持ち味や個性を味わっていただきたいなと思います。

キール・レイイングにも携わらせていただいたので、「飛鳥Ⅲ」は我が子とは申しませんが、私は親戚のおばさんぐらいの気持ちではおります。来年は進水式でついに海に浮かびますし、もう楽しみでしかたありません。

個人的には夢が一つあります。外国船では「バウリニューアル」といって、夫婦が結婚の節目に新たな誓いをする式を執り行うことがあります。人生は航路に例えられることもありますし、船上での新たな誓いをいつか、伝統ある飛鳥クルーズの船でできたら素敵でしょうね。

Sumiko Ueda
クルーズジャーナリスト、日本旅行作家協会会員、日本外国特派員協会会員。クルーズ旅行の楽しさを伝え続けて30年余り。外国客船の命名式に日本を代表するジャーナリストとして招かれるなど、世界的に活躍。「豪華客船はお気に召すまま」「ゼロからわかる豪華客船で行くクルーズの旅」など著書多数。2013年からクルーズ・オブ・ザ・イヤー選考委員。

photographs by Yosuke Owashi

テーブルナプキン

「飛鳥Ⅱ」のディナーテーブルを優雅に彩るテーブルナプキン。その折り方が毎晩ちがうことにお気づきでしょうか。和食、洋食、中華などディナーの種類によっても変わります。世界一周クルーズではお客さまに喜んでいただこうと、担当のウエイターが折り方の本を参考に100日間毎日違う折り方を選んでいるそうです。今回は代表的な10種類をご紹介します。さて、いくつ見かけたことがありますか?

飛鳥の美しいかたち

Collection 9

飛鳥Ⅱには
さまざまな美が、
さりげなく
息づいています。
その背景にある
ストーリーを知れば
確かめたくなる
はずです。

最もスタンダードな折り方。
シンプルで倒れにくい。
初日の洋食ディナーに
登場します。

司祭の帽子
Bishop

羽根をひろげて
羽ばたく蝶のイメージ。
洋食の日に
登場することが
あります。

蝶
Butterfly

ちょこんと斜めに
置かれた様子は
まさにニンジン!
和食の2日目に出ます。

ニンジン
Carrot

ニンジンに
似ていますが、
上から見るとイカの
感じが出ています。
和食の日に出ます。

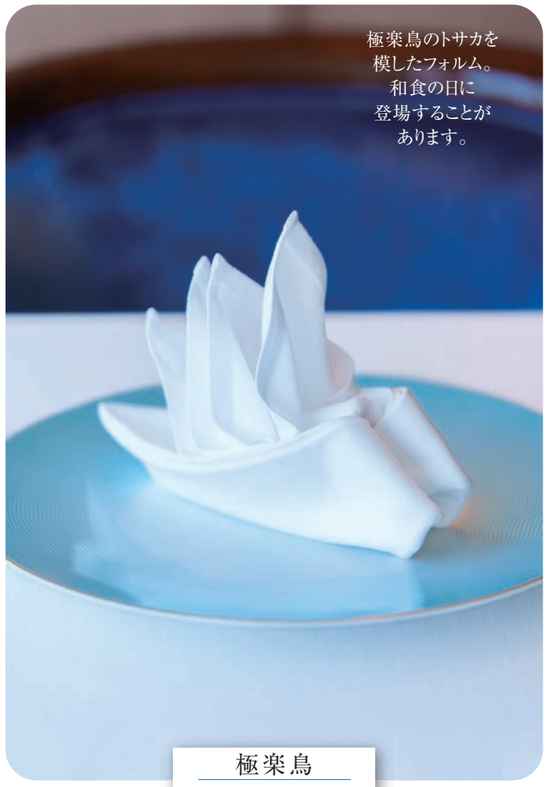
イカ
Squid

手先の器用さが
求められそうな
フォルムの星は、
フォーマルディナーに
登場します。

星
Star

ピンと立った
キャンドル。
イタリアンや
クリスマスなどにも
登場します。

キャンドル
Long Candle



極楽鳥のトサカを
模したフォルム。
和食の日に
登場することが
あります。

極楽鳥
Birds of Paradise

ほころび始めた
バラのつぼみをイメージした
可憐なデザイン。
和食の最初の夜に
登場します。

バラ
Rose

優雅に開いた扇は、
なかなか
出会えないかもしれません。
中華の時に登場します。

扇
Fan

皮を剥いたバナナは
なんだか
陽気な雰囲気。
洋食の時に登場します。

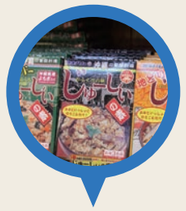
バナナ
Banana

Photographs by Norizumi Kitada

クルーが見つけた
寄港地のいちおし
第三回

那覇

沖縄



「じゅーしぃの素」

ホテル部
特命事項担当

Y.Nomura

海 上勤務の頃、那覇に寄港する際にお土産に買っていたのが「じゅーしぃの素」。沖縄の家庭料理でポピュラーな炊き込みご飯の素です。那覇にはいろいろなお土産があるのですが、家族のご指名はいつもこれでした。

にんじん、タケノコ、しいたけ、豚肉、ひじき、油揚げなど具沢山です。いくつかメーカーはありますが我が家のお気に入りはオキハムさん。夕飯に「ゴーヤーチャンプル」や「ポークたまご」などつくる時に、この「じゅーしぃの素」がプラス1品あれば、ぐっと沖縄気分が増します。

お土産物屋さんで売っていますが、地元のスーパーでも売っています。ということは、地元の方にもこの「じゅーしぃの素」は手軽でお馴染みの味なのでしょう。レトルトなので日持ちの心配がなく、クルーズのお土産にはおすすめです。

沖縄の風情を今に残す壺屋やちむん通り

市場の喧騒を抜ければ

訪ねてみました

市場本通り

那覇クルーズターミナルからクルマで約15分。国際通りのほぼ中央にある「市場本通り」にやってきました。観光客で賑わう通りを歩き、ふらりと入ったお土産屋さんでさっそく「じゅーしぃの素」を発見！あっけなくミッション完了です。取材班は、さらに足を伸ばして「壺屋やちむん通り」をそぞろ歩き。「やちむん」とは焼物を意味し、通り添いには陶芸工房や直売店が並んでいます。この界隈は沖縄の風情を今に残す落ち着きのある場所。シーサーのある門柱の傍らで猫がのんびり昼寝をしていました。

Photographs by Kazuhisa Natori

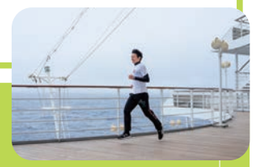
ASUKA WALKING & RUNNING CLUB Vol.3

ASUKA WALKING & RUNNING CLUB

今日もがんばれる！きれいな朝焼けで気持ちも新たに

歩いて、走って
デッキを回れば
「飛鳥Ⅱ」も世界を回る

1周440メートルの7デッキ「プロムナードデッキ」。現代の客船ではめずらしくなったぶ厚いチーク材が敷かれているので走り心地もやわらか。360度オーシャンビューのランニングコースは贅沢そのもの。「飛鳥Ⅱ」が走行する海域とその時々の風や波によって、千変万化する自慢のランニングコースです。さて、今日は誰が走っているのでしょう？



アシスタントパーサー/
ストアキーパー

Y.Shimizu

滋賀県出身。遠くへ行ける仕事に就きたいと、海上自衛隊の護衛艦で調理員になる。その後、陸のレストランでシェフとして働きながらソムリエの勉強をして、2021年から「飛鳥Ⅱ」に乗船。パーサー部・プロビジョン部に配属され今に至る。

Q1. 普段のお仕事は？

レセプションでフロント業務などをするアシスタントパーサーと、お部屋のアメニティなどの納品・発注・在庫管理業務を行うストアキーパーを兼任しています。

Q2. いつ走っていますか？

朝6時台か、お昼の休憩時間にデッキを走っています。いつも7周（＝3キロ）ぐらい走ります。距離を走ったり速く走ったりするのではなく、軽く汗を流すのが目的です。基本は船内の仕事なので、太陽をあびたり海風を感じる時間を作った方が健康的かなと思っています。

Q3. 走っているときは何を考えていますか？

船の仕事は気分転換が大切です。大変なことがあっても、次のシフトではしっかり持ち直して職場に戻ってこなくてはならないので、きれいな日の出や海を眺めながら、気持ちいいな～！今日もがんばれるぞってちょっと自己暗示をかけたりしています。後は、次の休暇のこととかを考えていることが多いですね。

Q4. 走っているときに見た美しい景色は？

日の出の頃に走っていることが多いのですが、ものすごくきれいな朝焼けが見える時があります。それとは逆に、夜明け前の暗い時間帯に、神戸に向かう大阪湾の手前で、船がつくる波の輪郭が青白く光って見えたことがあります。あれは、夜光虫だったのか。とても幻想的な光景でした。

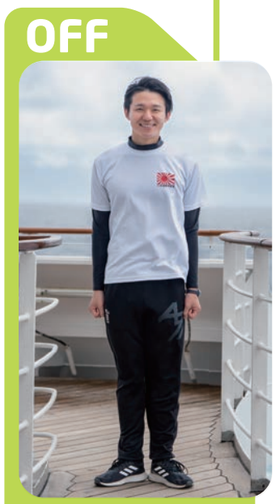
Q5. 海でのランニングに合う音楽は？

デッキで走るときは壮大な音楽を聞くと、とても気分が上がります。個人的には、古典的なバッハなどよりも近現代のワーグナーやマーラーが合うと思っています。ワーグナーのワルキューレや、チャイコフスキーのバレエ組曲もおすすめです。

ON

アシスタントパーサー

OFF



ランナー

2024年2月の
「常夏の島 グアム・サイパンクルーズ」にて

Photographs by Taishi Sakamoto

工房を訪ねて 第6回

松本育祥

伝統技法に基づく鋳造と着色技法で作品を作る鋳物師、松本育祥さん。東京の下町、西日暮里で4代続く鋳物工房を見学させていただきました。

宝飾品から仏像まで 鋳金は大きさも形も自由自在

鋳金は高温で溶かした金属を鋳型に注ぎ込んで作ります。指輪やペンダントのような小さなものから、ドアノブ、花器・茶道具、トロフィーや、銅像などの大きなものまで、どんな形でも思うままに作れるところが鋳金の面白さです。

学生時代はメディアアートと言って映像系の勉強をしていました。江戸時代の浮世絵の版木をスキャナーでコンピューターに取り込んでデジタル上で版木を再現するような研究をしていました。その時に、昔の人の手仕事の細やかさを間近で見て感動しました。もともと手を使って何かを作るのは好きだったので、もの作りに俄然興味がわきました。

その頃、父が国会議事堂のドアノブを修復するという大きな仕事を任され、とにかく人出が必要になり、父に教わりながら仕事を手伝ううちに鋳物の世界へと入りました。やがて工芸展などにも出品するようになったのです。

代々受け継がれる砂の山 湿り気を帯び柔軟な鋳型となる

作品を作るときは、まず原型を作ります。石膏などで原型を作ったら、金属を流すための鋳型を砂で作ります。普通の砂に見えるかもしれませんが、毎日湿度を調整したり、新しい砂を少しずつ継ぎ足しながら代々大切に使っています。一度鋳型にした砂も使い終わったらまた元に戻すので、もしかすると100年前の砂粒も混じっているかもしれません。やわらかい砂はどんな形にもなるけれど、押し固めればかたくなります。混じりけのない均一な砂を使うことで、熱い金属を流して鋳込んだときに美しい表面に仕上がるのです。

Yasuyoshi Matsumoto

一皮剥くと言っていますが、鋳込んだものの表面を金ヤスリなどで削りあげ、傷がなくなるまで磨きあげたら、色を付ける工程に入ります。出したい色によって工程は様々ですが、例えば「飛鳥Ⅱ」に展示されている「響花」という花器の赤い部分は、松炭を使って表面を銅が溶ける寸前の高温で焼いて酸化させることで色を出しています。

火の回り方を制御できれば、狙ったところに模様をきれいに出せるのではないかと、毎回挑むのですがよく裏切られます。でも狙ってもいなかった景色が現れたりするのがまたおもしろいです。

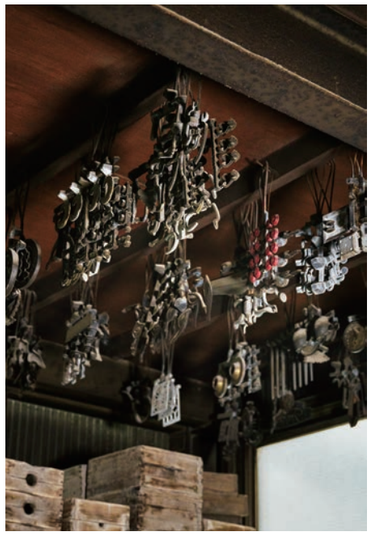
植物の力強い生命力を 曲線に込めて生まれた花器

作品の着想は、日常の暮らしの中から生まれます。この「響花」もそうです。ベランダに重ねて置いてあった植木鉢の脇から、去年のチューリップの球根が曲がりながらも力強く芽を出しているのを見つけて、植物の持つ生命力にあらためて感動しました。この力強い曲線を表現できないだろうかと思って作品にしてみました。

昨年、第1回「日本工芸会会員賞 飛鳥クルーズ賞」をいただきました。実は、受賞したときは「飛鳥Ⅱ」のことをよく知りませんでした。大きな客船の中に展示されると伺って、そのような特別な空間で周りの雰囲気に負けてしまわないだろうかと、楽しみなようで少しドキドキします。

作品を見ていただいて少しでも鋳金に興味を持っていただけたらうれしいです。船ではガラスケースに展示されていますが、日常では花を生けても良いし、ここに飾りたいと思う空間にそのまま置いていただいても良いと思います。自由に楽しんでいただけたら、作家としてもうれしいです。

火を制御して
狙ったところに模様を出したい
挑んでは裏切られるが
狙ってもいない景色も現れる



原型に砂を詰め
かたく包み込むように
鋳型を作っていく

Photographs by Yosuke Owashi

美食遊覧

第九回

食事は船旅の
大きな楽しみの一つ。
かねてより
国内外の食通を
唸らせてきた
日本郵船の客船。
その伝統を継承する
飛鳥Ⅱの
「美食」を巡ります。

フォーシーズン・
ダイニングルームの

スープ

カリフラワーのクリームスープ

「あともうひと匙食べたい」
そう思っていただけたら成功です。

コース料理では前菜の後にスープが提供されます。お腹と舌の準備をして、メインディッシュを迎えるのが役割。だからスープの味加減にはとても気をつかいます。スープの味がしっかりし過ぎてしまうと、次のお料理に行く前にお腹いっぱいになってしまうし、味の印象が残ってしまってメインディッシュの邪魔をする。お客様には「少しものたりない」「もう少し食べたい」と感じていただけるぐらいの加減で仕上げるよう心がけています。

ブイヨンとコンソメはすべて仕込みから船内で調理しています。最大800名様以上のお客様に提供するとなると結構大変なんです。鶏ガラを下処理することから始まり、炊いて、と工程が多くありますし、量も多い。船内調理のこだわりは飛鳥クルーズの伝統です。

その日のスープはその日のディナー全体の料理とのバランスで決められます。料理長が「新玉ねぎのポタージュで」と決めたら、「ベースは濃厚?」それとも「さらっと飲んでいただく?」「見栄えは?」など試作検討を重ねてクルーズ2週間前にはレシピが完成します。

本日のディナーでは、温かいスープ2種と冷製スープ1種からお選びいただきました。季節が夏だったり南国に向かうクルーズなどでは、気候に合わせて冷製スープをご提供することがあります。本日は横浜を出てグアムに向かう途上でしたので、船上の雰囲気もあって冷製スープを選ばれるお客様が多かったですね。

スープはディナーの脇役。でもそれぞれの料理を繋ぐ大切なもの。「あともうひと匙食べたい」お客様にそう思っていただくことがスープ担当としての本望です。

2024年2月「常夏の島
グアム・サイパンクルーズ」にて

アシスタント
セクションシェフ

E.Tada

冷製ブルーベリーのスープ

どれにしようか迷ってしまう
今宵のディナーは3つのスープからチョイス

阿波尾鶏と菜の花のブイヨンスープ

Photographs by Taishi Sakamoto